土井ヶ浜遺跡における玉類と装身原理

米田　克彦*

はじめに

土井ヶ浜遺跡は山口県下関市豊北町神田上に所在し、弥生時代の墓地遺跡として学史上著名である。響灘に面した砂丘上に立地するこの遺跡は、長期かつ複数次にわたる発掘調査によって、夥しい数の人骨が良好な状態で見つかっただけでなく、人骨に伴って多様な埋葬遺構や様々な副葬品が確認されたことから、弥生時代の墓制や集団、社会の構造を復元するうえで重要視されてきた。その膨大で情報量の多い調査成果については、重厚な発掘調査報告書（松下・小林編 2014）にまとめられた。

本稿では、土井ヶ浜遺跡で出土した石製玉類を中心に出土状況や生産地を検討したうえ、同遺跡における玉類副葬の特徴や装身原理について考察する。

1　土井ヶ浜遺跡の玉類出土遺構の分布と時期

土井ヶ浜遺跡では 19 次にわたる発掘調査によって弥生時代の埋葬遺構 160 基と 297 体に及ぶ人骨が見つかった。夥しい数の人骨の丹念な同定によって、これらの人骨の性別や年齢は、成人の男性 137 体、女性 104 体、未成人（小児、幼児、乳児）51 体、不明 5 体があることが明らかにされた（松下・小林編 2014）。同遺跡における埋葬と葬送習俗については、墓地の形成時期、墓地の構成、埋葬形式、墓地形成の背景など多岐にわたって細かく検討されている（乗安 2014a）。

墓域は東西約 130 m、南北約 70 mに及び、大きく東群、西群、北群に分かれる。埋葬遺構 160 基のうち、東群 132 基、西群 27 基、北群 1 基がある。東群と西群には埋葬遺構の配置や密集度、供献、副葬品の有無や種類などに差異が認められることが指摘されている。なかでも、副葬品を比べると、東群は貝輪、貝指輪、貝小玉、碧玉製管玉、ヒスイ製勾玉、アマゾナイト製小玉、ガラス製丸玉、鉄製品などと多様であるのに対し、西群は貝製の腕輪や異形貝製品の限られた品目しか認められない。この差異は各群の墓地を形成した母集団の人口規模、経済的格差、集団の性格などを反映したものと推定されている。東群の人骨配置図は図 1 のとおりである。

土井ヶ浜遺跡では碧玉・緑色凝灰岩製管玉 87 点、ヒスイ製勾玉 1 点、アマゾナイト製 2 点の石製玉類が出土した[(1)]。碧玉・緑色凝灰岩製が出土した埋葬遺構（人骨）は、東群の 5 号土坑墓（5 ～ 21 号人骨）、104 号土坑墓（103・104 号人骨）、109 号土坑墓（109 号人骨）、127 土坑墓（127 号人骨）、221 ～ 224 号人骨、248 土坑墓（248 号人骨）、311 号土坑墓（311 号人骨）、4 号石囲墓（315 号人骨）、ST1108 土坑墓（1108 A ～ C 号人骨）、ST1112 集骨遺構（1112 A ～ U 号人骨）、ST1118 土坑墓（1118 号人骨）、ST1120 土坑墓（1120 A・B 号人骨）、ST1121 集骨遺構（1121 A・B 号人骨）がある（表 1）。このほか、出土地不明の管玉が 49 点ある。

また、ヒスイ製勾玉は 223 号人骨、アマゾナイト製小玉は 4 号石囲墓（315 号人骨）、ST1116 土坑墓（1116 号人骨）から出土した。さらに、計 842 点以上に及ぶ貝小玉が出土した 19 基の埋葬遺構のうち、104 号土坑墓（103・104 号人骨）、109 号土坑墓（109 号人骨）、127 土坑墓（127 号人骨）、

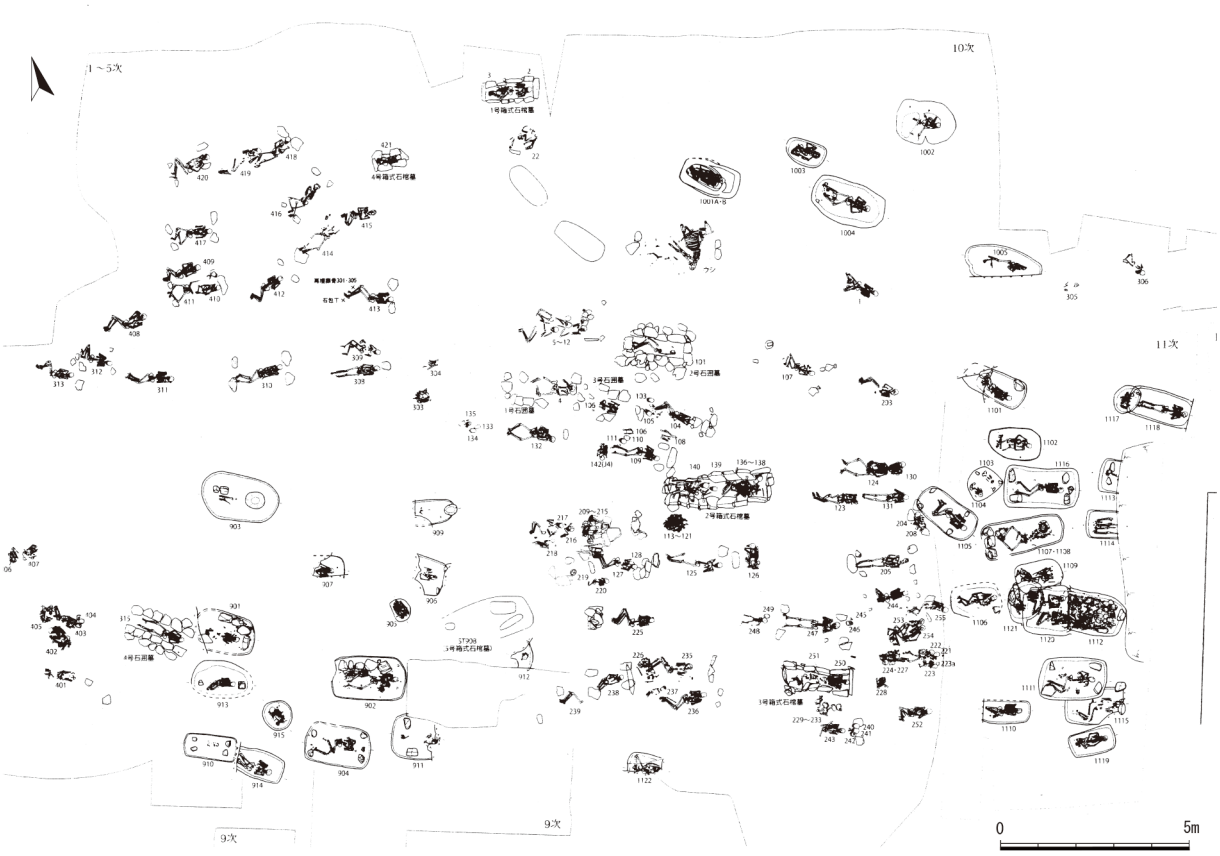


図 1　土井ヶ浜遺跡における人骨の位置図（1/200）

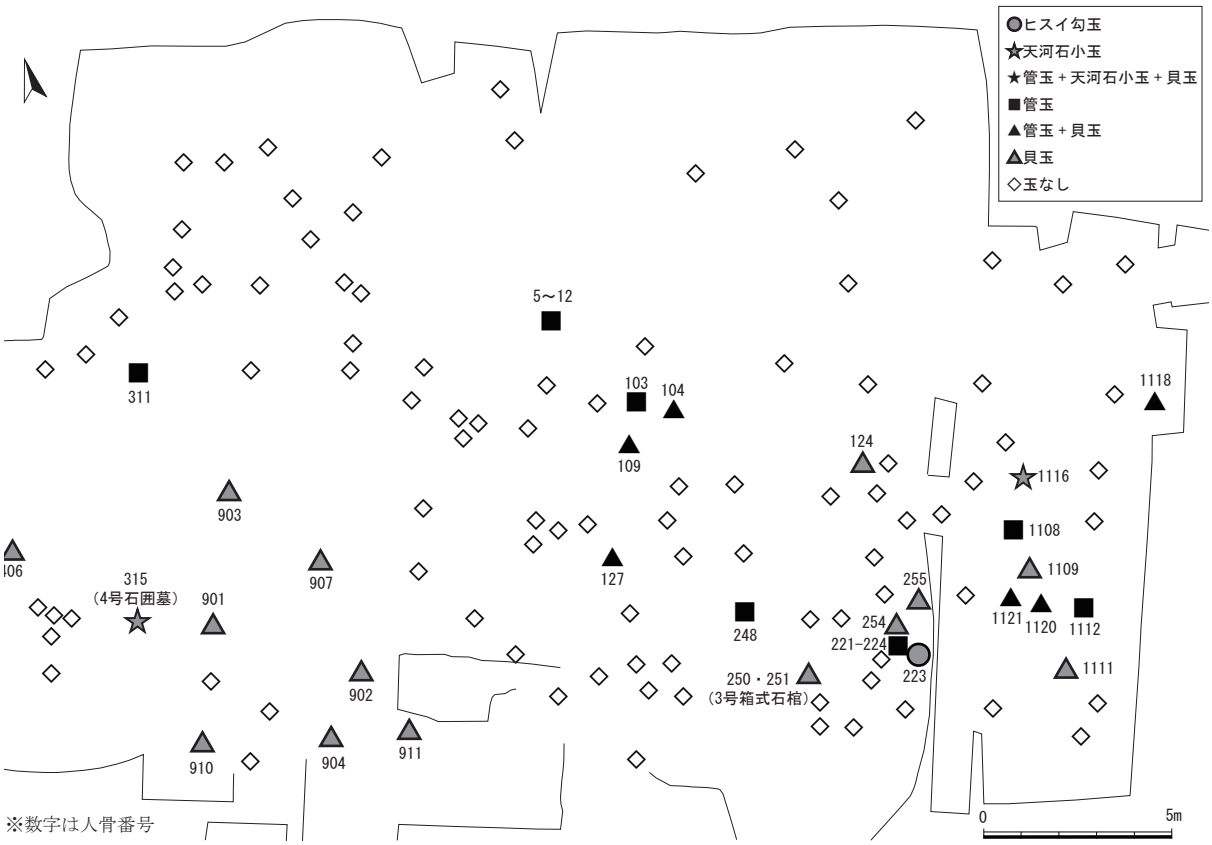


図 2　土井ヶ浜遺跡における玉類を伴う人骨の位置模式図（1/200）

ST1118 土坑墓（1118 号人骨）、ST1120 土坑墓（1120 A・B 号人骨）、ST1121 集骨遺構（1121 A・B 号人骨）は碧玉・緑色凝灰岩製管玉、4 号石囲墓（315 号人骨）は緑色凝灰岩製管玉とアマゾナイト製小玉を伴う。

多様な副葬品をもつ埋葬遺構が東群の墓域に偏ることは乗安和二三氏（2014a）によって示唆されたが、玉類が出土した埋葬遺構の分布をみると、図２のとおり、東群のなかでも玉類の種類ごとに埋葬遺構の分布が異なることが指摘できる。ヒスイ製勾玉は東群の東側（223 号人骨）、アマゾナイト製小玉は東群の東西端に単独に分布する。管玉は中央（５号土坑墓、104 号土坑墓の 103・104 号人骨、109 号土坑墓の 109 号人骨、127 土坑墓の 127 号人骨、221 ～ 224 号人骨、248 土坑墓の 248 号人骨）と南東側（ST1108 土坑墓の 1108 A～C 号人骨、ST1112 集骨遺構の 1112 A～U 号人骨、ST1118 土坑墓の 1118 号人骨、ST1120 土坑墓の 1120 A・B 号人骨、ST1121 集骨遺構の 1121 A・B 号人骨）に多く分布するほか、西側（311 号土坑墓の 311 号人骨、4 号石囲墓の 315 号人骨）に点在する。このうち、貝小玉を伴う遺構は中央（104 号土坑墓の 104 号人骨、109 号土坑墓の 109 人骨、127 土坑墓の 127 号人骨）と南東側（ST1118 土坑墓の 1118 号人骨、ST1120 土坑墓の 1120 A・B 号人骨、ST1121 集骨遺構の 1121 A・B 号人骨）に偏る。それに対して、貝小玉のみを副葬する遺構は南東側西寄り（124 号土坑墓の 124 号人骨、250 箱式石棺墓の 251 号人骨、254 土坑墓の 254 号人骨、255 土坑墓の 255 号人骨）と南西側（406 号集骨遺構の 406-1・2 号人骨、ST901 石囲墓の 901 号人骨、ST902 土坑墓の 902 A・B 号人骨、ST903 土坑墓の 903 号人骨、ST904 土坑墓の 904 号人骨、ST907 土坑墓の 907 号人骨、ST910 土坑墓の 910 号人骨、ST911 土坑墓の 911 号人骨）に分布する。このように玉類の種類ごとに埋葬遺構の分布が異なることは、性別や年齢を越えて、玉類を装身・副葬する小集団や時期に関係するのであろうか。

土井ヶ浜遺跡における墓地は、ST1302・1303・1601 土坑墓出土土器から弥生時代前期後半（板付Ⅱ a 並行期）に形成され始めた[2]。4 号石囲墓・104 号土坑墓は中期初頭、201 集骨遺構・ST1118 土坑墓は中期前半、ST1604・1903 土坑墓は中期中葉、第 4 層（褐色系細砂）では弥生時代前期から中期の土器が混在していたようである。その上面では弥生時代終末期（庄内式並行期）の遺構が確認されており、弥生時代中期（須玖Ⅱ式併行期段階）に造墓活動が終焉を迎えたと推定されている（乗安 2014a）。

２　土井ヶ浜遺跡の石製玉類

次に、単体埋葬と複数体埋葬ごとに石製玉類出土の埋葬遺構と出土状況について、発掘調査報告書をもとに概観するとともに、藁科哲男氏（1994・1997・2014）による石製玉類の産地分析の成果や大賀克彦氏（2001・2010b・2011）による管玉などの一連の研究を参考にして玉類の分類や系統についても触れる。埋葬遺構に伴う玉類については、表 1 にまとめたとおりである。

土井ヶ浜遺跡では計 160 基の埋葬遺構が確認されている。このうち、一次葬では単体埋葬が 87 基、合葬や追葬などの複数体埋葬が 31 基ほど認められる。一方、再葬の二次葬では単体埋葬が 13 基、複数体埋葬が 19 基、不明 10 基がある。埋葬遺構は、男性が女性よりもやや多い点、未成人の比率が全体の約 19％と低い点が示唆されるほか、「一棺一葬」の単体埋葬の事例が基本的な埋葬状況とし

表１　土井ヶ浜遺跡の埋葬遺構出土玉類一覧表

遺構	埋葬形式	人骨番号	性別	年齢	図番号	石材	器種	産地分析	領域	分類	共伴副葬品
221	土坑墓	223号人骨	－	幼児	2	ヒスイ	勾玉	糸魚川	－	半玦型（北陸西部系）	
4号	石囲墓	315号人骨	女	壮年	3	アマゾナイト	小玉	－	－	半島系	
					23	緑色凝灰岩	管玉	土井ヶ浜A	Sw	山陰系	
ST1116	土坑墓	1116号人骨	男	熟年	4	アマゾナイト	小玉	ST1116遺物群	－	半島系	
５号	土坑墓	14号人骨周辺	男	老年	－	－	管玉	－	－	－	
104号	土坑墓	103号人骨	女	老年	6	碧玉	管玉	女代南B	Sw	西日本系	
		104号人骨	女	熟年	7	碧玉	管玉	女代南B	Sw	西日本系	貝輪２、貝指輪３、貝珠54
					8	碧玉	管玉	女代南B	Sw	西日本系	
109号	土坑墓	109号人骨	女	熟年	9	碧玉	管玉	土井ヶ浜62	Se	東日本系	貝珠
127号	土坑墓	127号人骨	女	熟年	10	緑色凝灰岩	管玉	土井ヶ浜A	Sw	山陰系	貝指輪２、貝珠
					11	緑色凝灰岩	管玉	土井ヶ浜A	Sw	山陰系	
					12	緑色凝灰岩	管玉	土井ヶ浜A	－	山陰系？	
					13	緑色凝灰岩	管玉	土井ヶ浜A	－	山陰系？	
(221号)	(土坑墓)	221～224号人骨	※1	※1	14	碧玉	管玉	未定C	－	半島系	
					15	緑色凝灰岩	管玉	土井ヶ浜A	Sw	山陰系	
					16	碧玉	管玉	土井ヶ浜3-3	Sw	西日本系	
					17	碧玉	管玉	菩提・那谷	Sw	西日本系	
					18	碧玉	管玉	女代南B	Sw	西日本系	
					19	碧玉	管玉	女代南B	Sw	西日本系	
					20	碧玉	管玉	菩提・女代南B	Sw	西日本系	
248号	土坑墓	248号人骨	－	幼児	21	碧玉	管玉	女代南B	Se	西日本系？	
311号	土坑墓	311号人骨	女	壮年	22	碧玉	管玉	土井ヶ浜311	F’	西日本系	
ST1108	土坑墓	1108 A～C号人骨	※2	※2	24	碧玉	管玉	女代南B	Sw	西日本系	
ST1112	集骨遺構	1112 (SK-1～21) 号人骨	※3	※3	25	碧玉	管玉	菩提・女代南B	Sw	西日本系	
					26	碧玉	管玉	菩提・女代南B	Sw	西日本系	
					27	碧玉	管玉	女代南B	Sw	西日本系	
					28	碧玉	管玉	菩提・女代南B	Sw	西日本系	
					29	碧玉	管玉	女代南B	Sw	西日本系	
					30	碧玉	管玉	女代南B	Sw	西日本系	
					31	緑色凝灰岩	管玉	土井ヶ浜A	Sw	山陰系	
ST1118	土坑墓	1118号人骨	男	成年	32	碧玉	管玉	女代南B	Sw	西日本系	
					33	碧玉	管玉	土井ヶ浜11	Se	東日本系	
					34	碧玉	管玉	菩提・女代南B	Sw	西日本系	
					35	碧玉	管玉	土井ヶ浜3	Se	東日本系	
					36	碧玉	管玉	菩提・女代南B	Sw	西日本系	
					37	碧玉	管玉	菩提・女代南B	Sw	西日本系	
					38	碧玉	管玉	菩提・女代南B	Sw	西日本系	
					39	碧玉	管玉	菩提・女代南B	Sw	西日本系	
					40	碧玉	管玉	女代南B	Sw	西日本系	
					41	碧玉	管玉	菩提・女代南B	Sw	西日本系	
					42	碧玉	管玉	女代南B	Sw	西日本系	
					43	碧玉	管玉	菩提・女代南B	Sw	西日本系	
					44	碧玉	管玉	女代南B	Sw	西日本系	
ST1120	土坑墓	1120 A・B号人骨	※4	※4	45	緑色凝灰岩	管玉	土井ヶ浜A	Sw	山陰系	貝珠14
					46	緑色凝灰岩	管玉	土井ヶ浜A	Sw	山陰系	
					47	緑色凝灰岩	管玉	土井ヶ浜A	Sw	山陰系	表採
ST1121	土坑墓	1121 A・B号人骨	※5	※5	48	碧玉	管玉	女代南B	F’？	西日本系？	

※１　221号人骨は壮年男性、222・224号人骨は老年男性、223号人骨は幼児
※２　熟年男性1108A号人骨は熟年男性、1108B号人骨は成年女性、1108C号人骨は老年女性
※３　人骨は24個体分。このうち、男性12体、女性８体、小児１体、幼児３体
※４　1120Ａ号人骨は熟年女性、1120Ｂ号人骨は熟年男性
※５　1121Ａ号人骨は成人女性、1121Ｂ人骨は成人男性
※６　産地分析は藁科2014、領域・分類は大賀2001・2011・2012、木下1987

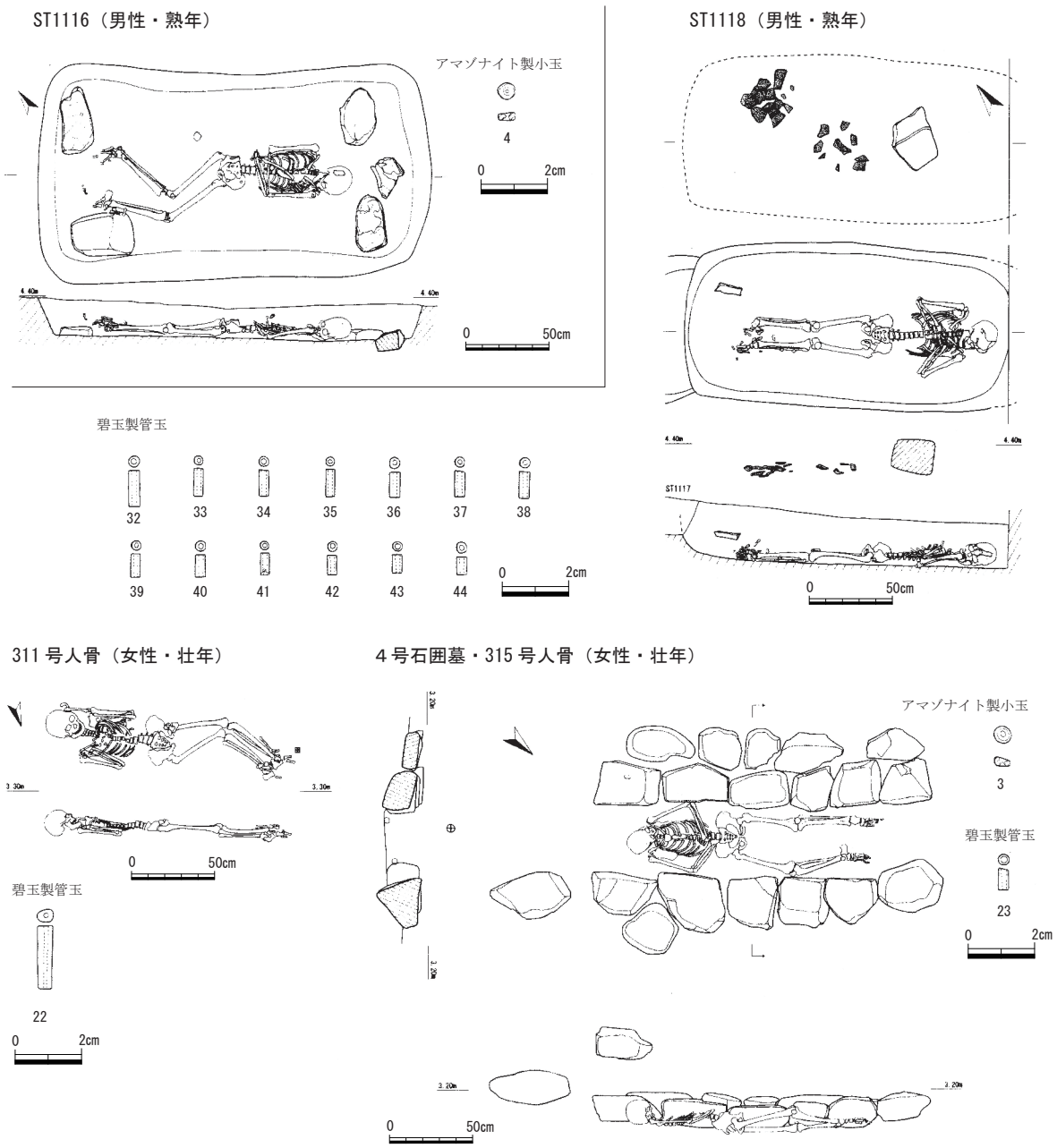


図 3　玉類を伴う単体埋葬の人骨出土状況（1/40・玉類は 1/2）

て最も多い点、二次葬では同一墓坑への複数体埋葬例が比較的多く認められる点などが特徴として指摘されている（乗安 2014a）。

単体埋葬遺構では 311 号土坑墓（311 号人骨）、4 号石囲墓（315 号人骨）、ST1116 土坑墓（1116 号人骨）、ST1118 土坑墓（1118 号人骨）に石製玉類が副葬された（図３）。

311 号土坑墓の 311 号人骨は壮年女性で、仰臥姿勢であった。碧玉製管玉は 1 点あり、産地分析では土井ヶ浜 311 遺物群、長さ 19.0㎜、直径 4.1㎜で領域Ｆ ' に重なり、西日本系の可能性がある。

4 号石囲墓の 315 号人骨は壮年女性で、仰臥姿勢で埋葬された。出土遺物は緑色凝灰岩製管玉とアマゾナイト製小玉が各 1 点、貝玉 170 点がある。このうち、管玉は産地分析では土井ヶ浜Ａ遺物群である。長さ 6.2㎜、直径 3.1㎜、領域 Sw で山陰系である。

ST1116 土坑墓では、熟年男性 1 体（1116 号人骨）が仰臥屈肢の姿勢で埋葬された。墓坑内からアマゾナイト製小玉が 1 点出土した。

ST1118 土坑墓では塾年男性 1 体（1118 号人骨）が仰臥伸展で埋葬された。墓坑上面から上半にかけて、碧玉製管玉 13 点と貝小玉 1 点が出土した。管玉は産地分析により、菩提・女代南Ｂ群が 7 点、女代南Ｂ群が 4 点、土井ヶ浜３・11 遺物群が各 1 点と推定された。菩提・女代南Ｂ群碧玉製の管玉７点は長さ 5.4 ～ 8.0㎜、径 2.7 ～ 3.4㎜、女代南Ｂ群碧玉製の管玉 4 点は長さ 5.2 ～ 10.7㎜、径 3.0 ～ 3.4㎜で、いずれも領域 Sw、西日本系に分類される。また、土井ヶ浜３遺物群の管玉は長さ 8.5㎜、径 2.7㎜、土井ヶ浜 11 遺物群の管玉は長さ 8.3㎜、径 2.7㎜で、両者は領域 Se、東日本系の可能性がある。

また、単体埋葬遺構出土の貝小玉は 901 号石囲墓（901 号人骨・成年女性）で３点、910 号土坑墓（910 号人骨・乳児）で 16 点、911 号土坑墓（911 号人骨・男性）で３点が出土した。

このほか、埋葬状況は定かではないが、221 ～ 224・227 号人骨は重複して出土し、６体分が確認された[(3)]。221 号人骨は壮年男性、222・224 号人骨は老年男性、223 号人骨は幼児、227 号人骨は熟年男性と推定された。221 号人骨の下半身、223 号人骨は埋葬状態を保ち、仰臥姿勢で埋葬された。これらの人骨検出の際に 966 個の貝珠が出土した記録があるうち、869 点が確認されている。また、223 号人骨の頭蓋内からヒスイ製勾玉が 1 点見つかった。勾玉は長さ 18.4㎜、幅 11.9㎜の小形で、形態は半玦型（木下 1987）、石針で両面から穿孔されている。ヒスイの産地分析では新潟県糸魚川産と推定されている（藁科 2014）。221 ～ 224・227 号人骨周辺からは管玉７点が出土しており、産地分析では未定Ｃ遺物群 1 点、土井ヶ浜Ａ遺物群、土井ヶ浜 3-3 遺物群、菩提・那谷、菩提・女代南Ｂ遺物群が各 1 点、女代南Ｂ遺物群２点と様々である。このうち、未定Ｃ遺物群の管玉は長さ 10.3㎜、直径 4.1㎜で半島系（大賀 2010a）、土井ヶ浜Ａ遺物群の管玉は長さ 9.6㎜、直径 3.5㎜で領域 Sw の山陰系、土井ヶ浜 3-3 遺物群、菩提・那谷、菩提・女代南Ｂ遺物群の管玉は長さ 3.3 ～ 5.3㎜、直径 2.6 ～ 2.9㎜で、領域 Sw の西日本系に分類される。

一方、複数体埋葬の遺構では、５号土坑墓（５～ 21 号人骨）、104 号土坑墓（103・104 号人骨）、109 号土坑墓（109 号人骨）、127 号土坑墓（127 号人骨）、248 号土坑墓（248 号人骨）、ST1108 土坑墓（1108 Ａ～Ｃ号人骨）、ST1112 集骨遺構（1112 Ａ～Ｕ号人骨）、ST1120 土坑墓（1120 Ａ・Ｂ号人骨）、ST1121 集骨遺構（1121 Ａ・Ｂ号人骨）９基から石製玉類が見つかった（図４・５）。

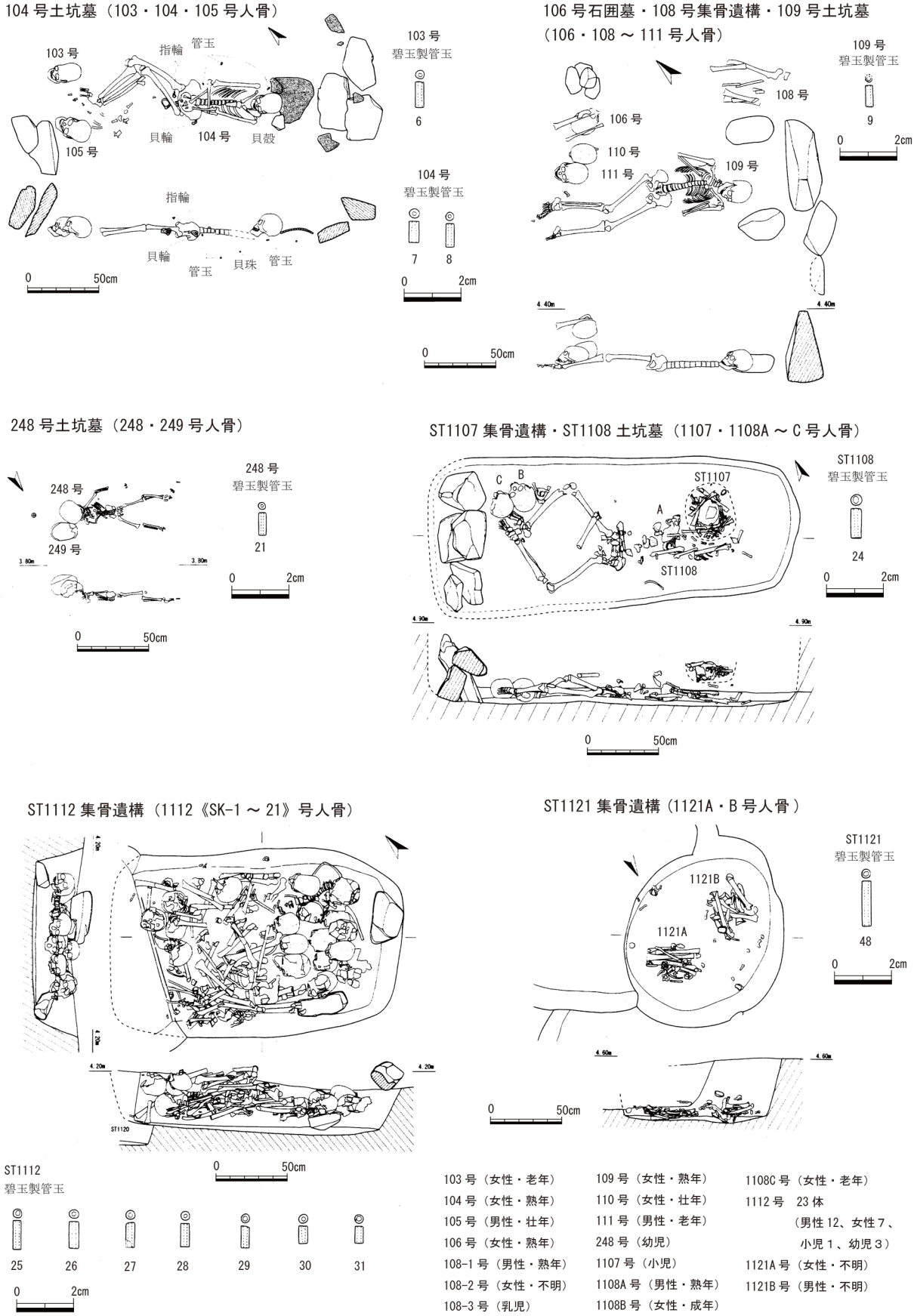
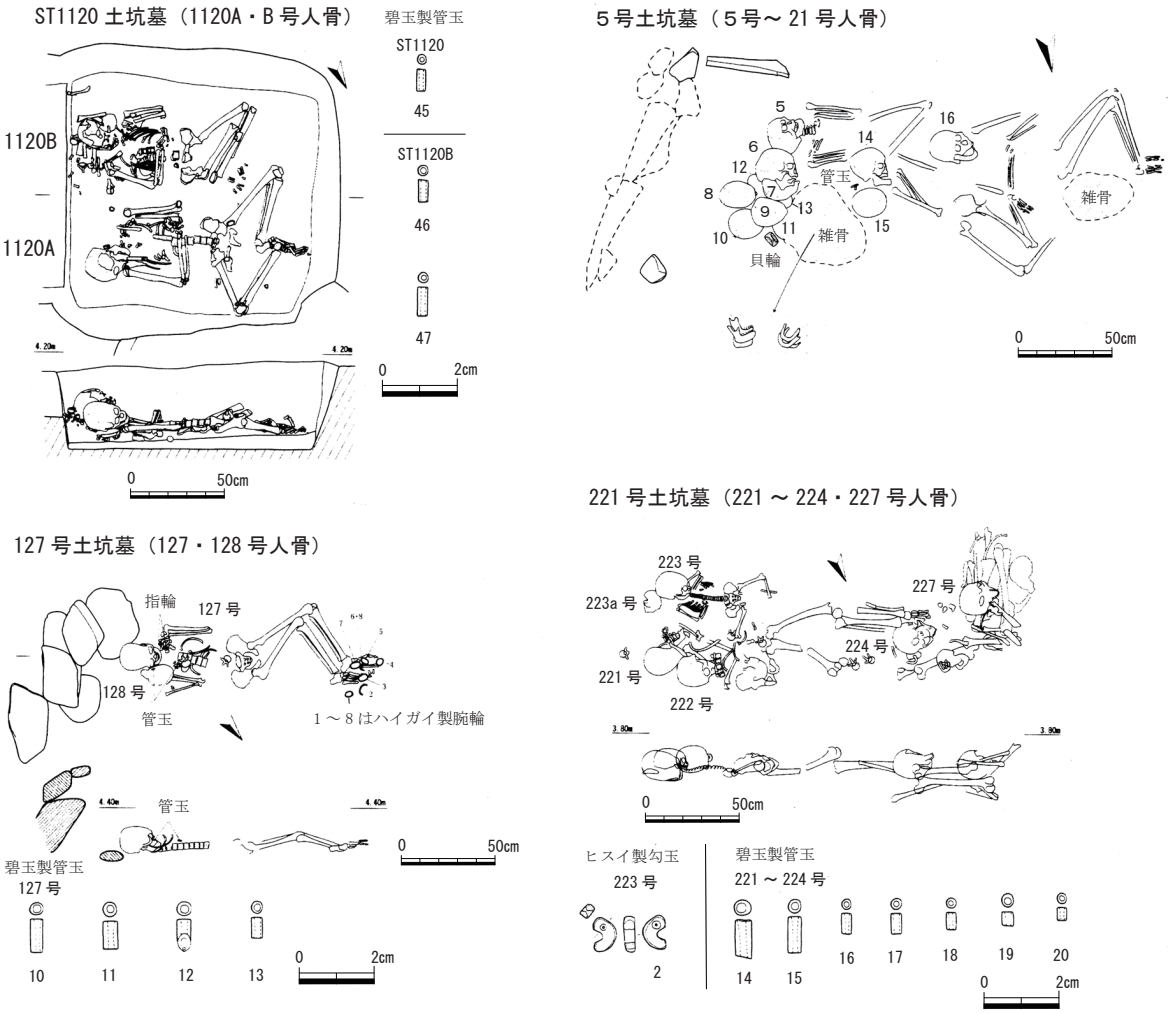


図４　玉類を伴う複数埋葬の人骨出土状況①（1/40、玉類は 1/2）



1120A 号人骨（女性・熟年）
1120B 号人骨（男性・熟年）
5 号人骨（女性・老年）
6 号人骨（男性・熟年）
7 号人骨（幼児）
8 号人骨（女性・壮年）
9 号人骨（－）
10 号人骨（不明）
11 号人骨（女性・熟年）
12 号人骨（小児）
13 号人骨（男性・熟年）
14 号人骨（男性・老年）
15 号人骨（不明）
16 号人骨（男性・老年）
127 号人骨（女性・熟年）
128 号人骨（幼児）
221 号人骨（女性・熟年）
222 号人骨（男性・老年）
223 号人骨（幼児）
223a 号人骨（小児）
224 号人骨（男性・老年ほか）
227 号人骨（男性・熟年）

図 5　玉類を伴う複数埋葬の人骨出土状況② (1/40、玉類は 1/2)

5 号土坑墓では 3 体（5・14・16 号人骨）と頭骨群（6 ～ 13・15・17 ～ 21 号人骨）が見つかり、少なくとも 14 体分の人骨が埋葬された。このうち、5 号人骨が原埋葬者で、頭骨群は再葬、14・16 号人骨は追葬と考えられている。性別と年齢は、5 号人骨が老年女性、6・13 号人骨が熟年男性、7 号人骨が幼児、8 号人骨が壮年女性、11 号人骨が熟年女性、12 号人骨が小児、14・16 号人骨が老年男性、他は不明である。老年男性の 14 号人骨の頭骨周辺から碧玉製管玉 2 点が出土したという記録が残るほか、頭骨群からゴホウラ製貝輪 1 点が見つかった。

103 ～ 105 号人骨は同一埋葬施設（104 号土坑墓）に埋葬されたとみられる。103 号人骨は老年女性で、104 号人骨の足元において仰臥の姿勢で見つかった。管玉 1 点を伴うとされる。管玉は女代南 B 群碧玉製管玉で、長さ 9.1㎜、直径 3.2㎜である。その領域は Sw で、西日本系である。一方、104 号人骨は熟年女性で、103・105・109 号人骨に仰臥の状態で近接して確認された。土器枕を有し、ゴホウラ製腕輪 2 点、貝製指輪 3 点、貝珠 54 点、碧玉製管玉 (4) が着装された可能性が示唆されている。

管玉は女代南Ｂ群碧玉製管玉で、長さ 7.5 ～ 8.5㎜、直径 3.2 ～ 3.6㎜である。平均は長さ 8.0㎜、直径 3.4㎜であり、その領域は Sw の西日本系である。

109 号土坑墓は本来の埋葬状態を保った 109 号人骨に並列するように、頭骨や首骨のみの 110・111 号人骨が伴う。このうち、109 号人骨は熟年女性で、埋葬姿勢は仰臥であった。頭部側に立石と配石が確認され、貝珠 13 点と碧玉製管玉 1 点が伴う。管玉は産地分析では土井ヶ浜 62 遺物群とされ、長さ 7.6㎜、直径 2.4㎜、領域は Se で、東日本系の可能性がある。

127 号土坑墓は本来の埋葬状態をほぼ保つ 127 号人骨、かき乱された状態の 128 号人骨が見つかった。127 号人骨は熟年女性で、仰臥姿勢で埋葬された。貝製指輪 2 点は左手の第 2 ・ 4 指の基節骨にはまった状態で確認された。このほか、貝珠 152 点、緑色凝灰岩製管玉 4 点を伴い、このうち管玉 3 点は上半身、 1 点は足部付近から出土したという。産地分析では 4 点ともに土井ヶ浜Ａ遺物群である。管玉 4 点のうち 2 点は完形で、長さ 7.1 ～ 8.8㎜、直径 3.3 ～ 3.8㎜、領域 Sw で山陰系である。

248 号土坑墓では、老年男性の 247 号人骨の西隣で 248 号人骨が埋葬主軸をそろえた状態で確認された。248 号人骨は 2 歳の幼児で、仰臥の姿勢で埋葬された。碧玉製管玉 1 点を伴う。管玉は女代南Ｂ群碧玉製管玉で、長さ 7.9㎜、直径 2.5㎜である。その領域は Se で、東日本系の可能性がある。

ST1108 土坑墓では熟年男性（1108A）、成年女性（1108B）、老年女性（1108C）の 3 体が埋葬された。このうち、熟年男性（1108A）は仰臥屈肢の姿勢で葬られた。その左方付近では貝製の指輪 1 点が出土したほか、墓坑内から碧玉製管玉 1 点が見つかった。管玉は産地分析では女代南Ｂ群碧玉製で、長さ 10.3㎜、直径 3.9㎜で領域 Sw、西日本系とみられる。

ST1112 集骨遺構には、21 個体分の頭骨を含む大量の人骨が再葬された。墓坑の東半に頭骨 14 個体を含む人骨が集められ、老年男性 1 、熟年～老年男性 1 、熟年男性 5 、成年～熟年女性 1 、若年 2 、小児 3 、幼児 1 で、成人男性が多い。それに対し、墓坑西半は熟年男性 1 、熟年女性 2 、若年 2 であった。これらは一括して再葬されたものとみられている。体部骨群からはアツソデガイ製貝輪 1 点、墓坑から碧玉・緑色凝灰岩製管玉 7 点、貝小玉 35 点が出土した。管玉は産地分析により、菩提・女代南Ｂ群と女代南Ｂ群が各 3 点、土井ヶ浜Ａ遺物群 1 点と推定された。菩提・女代南Ｂ群製の管玉 3 点は長さ 8.3 ～ 10.2㎜、径 2.9 ～ 3. 1㎜、女代南Ｂ群の碧玉製管玉 3 点は長さ 6.4 ～ 8.8㎜、径 3.0 ～ 3.2㎜で、いずれも領域 Sw、西日本系に分類される。また、土井ヶ浜Ａ遺物群の緑色凝灰岩製管玉 1 点は長さ 6.1㎜、径 3.1㎜で、領域 Sw、山陰系である。

ST1120 土坑墓には、熟年男女 2 体が仰臥屈肢の姿勢で埋葬された。南側には女性（1120 Ａ号人骨）、北側は男性（1120 Ｂ号人骨）が並列しており、同時に埋葬されたと推定されている。墓坑内からは碧玉製管玉 2 点、貝小玉 14 点か見つかった。管玉 2 点は長さ 5.9㎜、径 2.7 ～ 3.1㎜である。このほか、1120 Ｂでは管玉 1 点が表採されており、長さ 7.6㎜、径 2.8㎜である。これら 3 点の管玉は、産地分析によって土井ヶ浜Ａ群とされ、領域 Sw、山陰系とみられる。

ST1121 集骨遺構は東半に女性の 1121 Ａ号人骨、西半に男性（1121 Ｂ人骨）の体部骨が集積されていた。墓坑上半から碧玉製管玉と貝小玉が各 1 点出土した。管玉は産地分析によって女代南Ｂ群と推定され、長さ 15.9㎜、径 3.1㎜で、領域Ｆのなかでも細長型の西日本系か。

また、複数体埋葬遺構では貝小玉が 250 号箱式石棺墓（250・251 号人骨）で数十点、254 号土

坑墓（253・254 号人骨）で数点、255 号土坑墓（255 号人骨）で 11 点、406 号集骨遺構（406-1・2 号人骨）で 48 点、ST902 土坑墓（902B 号人骨）で 482 点、ST907 土坑墓（907 号人骨ほか）で 7 点、ST1109 土坑墓（SK-1・2 号人骨ほか）で 4 点、ST1111 土坑墓（1111 A・B 号人骨）で貝丸玉 1 点と貝小玉 4 点が見つかった。

このほか、第 1 ～ 5 次調査では出土地点が不明な管玉が 43 点ある（報告書№ 49 ～ 91）。№ 91 を除く 42 点は産地分析が行われ、未定 C 群 1 点、菩提・女代南 B 群 8 点、女代南 B 群 12 点、土井ヶ浜 A 遺物群 17 点、新穂村 B 遺物群 1 点、土井ヶ浜 22・24・27 遺物群が各 1 点との結果であった（藁科 2014）。

以上では、単体埋葬遺構と複数体埋葬遺構ごとに石製玉類の出土状況を中心にまとめた。

一次葬の単体埋葬遺構からの石製玉類や貝小玉の出土例は 8 例あり、玉類を副葬した被葬者の性別や年齢を知る重要な手がかりとなる。埋葬形式は土坑墓 6 例、石囲墓 2 例があり、単体埋葬の石棺墓からは玉類は出土していない。玉類の出土状況は良好ではなく、具体的な装身部位や方法を把握することは難しい。石製玉類は壮年女性 2 例（311・315 号人骨）、熟年男性 1 例（1116 号人骨）、成年男性 1 例（1118 号人骨）の計 4 例、貝小玉のみは壮年女性（901 号人骨）、成人男性（911 号人骨）、乳児（910 号人骨）が各 1 例と限られ、玉類副葬が特定の性別や年齢に偏ることはない。石製玉類は 1 点の副葬が多いのに対し、貝小玉は複数個を副葬する例が 4 例ほど認められる。そうしたなか、壮年女性を埋葬した 4 号石囲墓は、アマゾナイト製小玉 1 点、緑色凝灰岩製管玉 1 点、貝小玉 176 点が出土しているが、石囲墓という埋葬形式であるうえに、複数種類の石製玉類や多量の貝小玉を伴うことから、同遺跡のなかでも特別な埋葬遺構や被葬者であったと想像される。また、朝鮮半島に特徴的なアマゾナイト製小玉は、4 号石囲墓の 315 号人骨（壮年女性）と ST1116 土坑墓の 1116 号人骨（熟年男性）に副葬されており、成人の単体埋葬遺構に限られるうえ、渡来人との関わりが強い被葬者であったことも推測される。さらに、成年男性を埋葬した ST1118 土坑墓では、墓坑上面から上半にかけて管玉 13 点と貝小玉 1 点が出土していることから、玉類を装身あるいは副葬して埋葬したのではなく、墓坑上で行われた埋葬儀礼で玉類が使用されたものと想像される。

それに対して、複数体埋葬遺構の石製玉類や貝小玉・丸玉の出土例は計 19 例ある。埋葬形式は土坑墓 13 例、集骨遺構 4 例、箱式石棺墓 1 例で、土坑墓が大多数を占める点は単体埋葬と同様である。集骨遺構からも玉類の出土が一定数あることから、再葬時にも玉類が伴うとみられる。また、箱式石棺墓から貝小玉が出土している。複数体埋葬遺構からの玉類出土例の多くは玉類を装身・副葬した被葬者の特定が難しいなか、石製玉類は老年女性 1 例（103 号人骨）、熟年女性 3 例（104・109・127 号人骨）、幼児 2 例（223・248 号人骨）、老年男性 1 例（14 号人骨）が確認できる。また、貝小玉・丸玉のみの出土は熟年女性（251 号人骨）、壮年女性（255 号人骨）、男性（406 号人骨）が各 1 例ある。多数の貝小玉が出土した例をみると、127 号土坑墓では原埋葬者である 127 号人骨（熟年女性）の周辺で管玉 4 点と貝小玉 152 点が見つかったほか、ST902 土坑墓では初葬者の 902B 号人骨（壮年女性）周辺で墓坑内に 482 点が散乱した状態であった。こうした状況から、後 2 者の遺構では初葬や追葬に多量の貝小玉が撒かれたことや、原埋葬や初葬に伴って多量の貝小玉が用いられたことがあった可能性が指摘できる。

石製玉類の全体的な出土傾向をまとめておく。石製玉類を伴う被葬者の性別や年齢が確認できた10 例のうち、成人女性６例、成人男性３例、未成人２例が認められる。女性は老年１例、熟年３例、壮年２例、不明１例ある。女性では老年から壮年まで幅広い年齢に石製玉類の副葬が認められる。男性は熟年３例のみである。男女とも熟年に石製玉類の副葬例が多いということは、熟年になって石製玉類を装身したこと以外に、歳を重ねるたびに玉類を装身する機会が増えることや、死亡・埋葬時期を反映した結果であることも考慮しておきたい。それに対して、未成人への石製玉類の副葬は幼児１例のみである。限られた事例であるが、土井ヶ浜遺跡では石製玉類は女性への副葬が大半を占めるとともに、男女ともに熟年への副葬が主体であったと言える。

ヒスイ製勾玉は 223 号人骨（幼児）に伴っており、未成人の幼児に副葬されている。また、アマゾナイト製小玉は一次葬の単体埋葬遺構に葬られた成人男女に副葬された。

管玉は、単体埋葬では ST1118 土坑墓の 1118 号人骨（成年男性）の上層で 13 点（西日本系 11 点、東日本系２点）、複数体埋葬では 104 号土坑墓の 104 号人骨（熟年女性）で 25 ～ 26 点が出土したと伝わる例が最も多く、次いで 23 体の人骨を納めた ST1112 集骨遺構で７点（西日本系６点、山陰系１点）が出土している。これら以外の管玉が出土した埋葬遺構（104・109・127・248・311 号・ST1108･ST1120 土坑墓、4 号石囲墓）は、成人男女の埋葬が大半を占め、管玉が１～４点と少ない。管玉の系統別にみると、緑色凝灰岩製の山陰系管玉（領域 Sw）は 127 号人骨、4 号石囲墓の 315 号人骨、ST1120 土坑墓の 1120 B 号人骨、菩提・那谷・女代南 B 群碧玉製の西日本系（領域 Sw）は 104 号土坑墓の 104 号人骨、菩提・那谷・女代南 B 群碧玉製の東日本系（領域 Se）の可能性がある管玉は 248 号土坑墓の 248 号人骨、ST1108 土坑墓の 1108 号人骨から出土しており、各遺構では管玉の分類や領域は１系統であることが共通する。このことは、管玉が生産、流通した後、土井ヶ浜遺跡では管玉の装身・埋葬が一元的であった可能性が高い。

３　土井ヶ浜遺跡出土石製玉類の流通

続いて、土井ヶ浜遺跡で出土した碧玉・緑色凝灰岩製管玉、ヒスイ製勾玉、アマゾナイト製小玉の流通を考えるにあたり、弥生時代前期～中期の玉生産を概観する。

土井ヶ浜遺跡で墓地が造られた弥生時代前期後半から中期は、半島系の未定 C 群碧玉製管玉（藁科 1997、李ほか 2008、大賀 2010a）が朝鮮半島から日本列島の西日本各地にもたらされたほか、大陸系磨製石器や管玉を作る技術が大陸から朝鮮半島を経由して日本列島に伝わり、日本海沿岸を中心に玉生産が展開していく。

日本列島における弥生時代の玉作遺跡は、河村好光氏の集成によると、前期（中期初頭を含む）８、中期 168、後期 127 の計 303 遺跡が確認されている（河村 2010）。弥生時代前期～中期の玉作遺跡の分布については、米田 2013・2021 をもとに図６に示した。管玉生産が始まる弥生時代前期の玉作遺跡の分布をみると、弥生時代前期中葉は鳥取県長瀬高浜遺跡、岡山県南溝手遺跡があり、山陰と山陽の一部に分布が限られる。そして、前期後葉になると、山陰の鳥取県長瀬高浜遺跡、島根県西川津遺跡、布田遺跡で緑色凝灰岩製管玉、北陸の新潟県大塚遺跡でヒスイ製の不定形な玉類が作られた。なかでも、西川津遺跡、布田遺跡では磨製石器や木製品とともに、緑色凝灰岩製管玉も中期まで盛ん

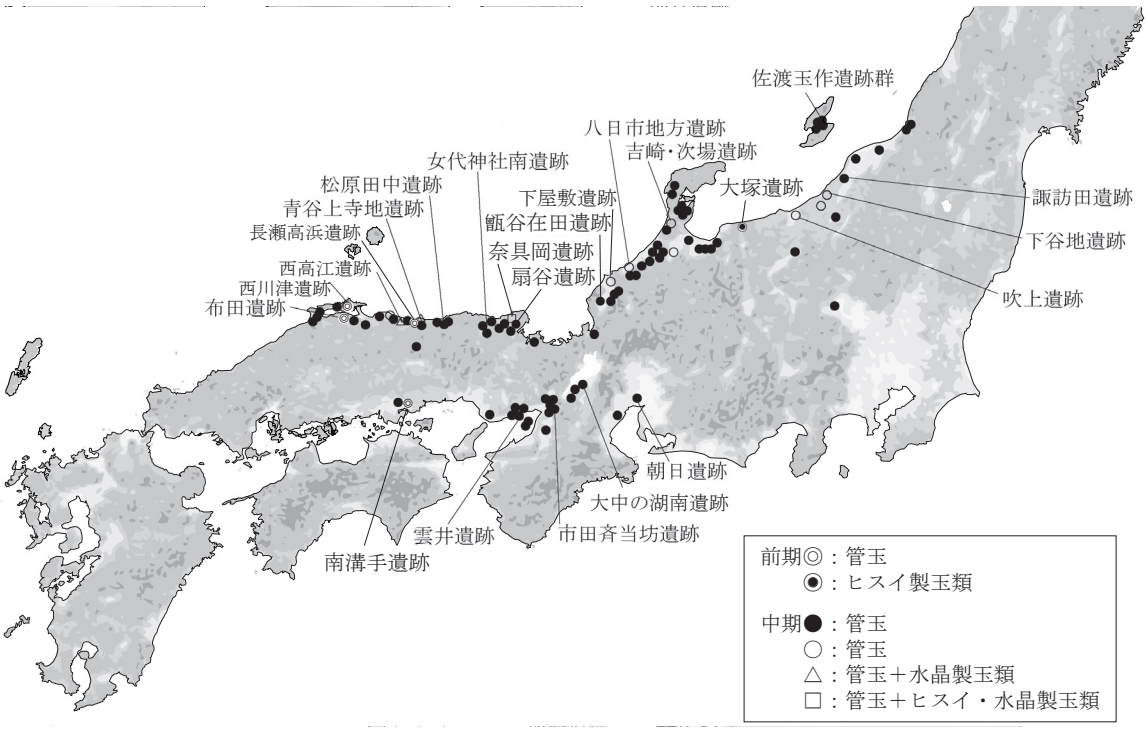


図６　弥生時代前期～中期における主な玉作遺跡の分布

に生産された。そして、前期末～中期初頭は京都府扇谷遺跡、大阪府八雲遺跡でも緑色凝灰岩製管玉未成品が見つかっており、近畿北部の丹後半島、河内平野の淀川下流域にも管玉生産が拡散した。

中期前葉になると、島根県西川津遺跡、布田遺跡、兵庫県雲井遺跡、京都府余部遺跡、愛知県朝日遺跡、福井県甑谷在田遺跡、下屋敷遺跡、石川県八日市地方遺跡などで玉生産が行われ、遺跡数が次第に増加する。そして、中期中葉から後葉には島根県西川津遺跡、布田遺跡、福井県下屋敷遺跡、石川県八日市地方遺跡に加え、鳥取県青谷上寺地遺跡、東前遺跡、兵庫県女代神社南遺跡、京都府奈具岡遺跡、市田斉当坊遺跡、滋賀県大中の湖南遺跡、新潟県吹上遺跡、下谷地遺跡、平田遺跡などで玉生産が盛んに行われ、山陰、近畿、東海、北陸、佐渡の広範囲に玉作遺跡が広がった。当該期は玉作遺跡の数も大幅に増え、玉生産が最盛期を迎えた。特に、八日市地方遺跡は石川県小松市や加賀市周辺で産出する菩提・那谷・滝ヶ原産碧玉や女代南Ｂ群碧玉が大量に出土し、原石から完成品まで一貫した管玉生産が行われた。また、北陸の玉作遺跡では管玉とともにヒスイ製勾玉も製作された。

（１）碧玉・緑色凝灰岩製管玉

弥生時代前期の玉作遺跡では緑色凝灰岩を用いて管玉を作るのが特徴である。その製作技術は、長瀬高浜技法と西川津技法（寺村 1990）があり、ともに山陰を中心に行われた。

まず、長瀬高浜技法は長瀬高浜遺跡や南溝手遺跡を代表例とする。この技法は原石や石核から打撃分割により適当な管玉の素材を作出し、瑪瑙製打製石針で穿孔する技法で、大賀克彦氏（2001・2011）によるＸ技法に相当する。この技法は中期以降にはほとんど継続せず、初現的で空間・時間的にも限定された。製品は寸胴で小形短身のものが多く、規格性に乏しい。

一方、西川津技法は西川津遺跡、布田遺跡を代表例とし、大賀克彦氏（2001）のＡ技法にあたる。軟質の緑色凝灰岩を用い、石核の小口面から石鋸で施溝分割することで板状剥片を作出し、表裏面を平坦になるように研磨して板状素材を作るところに特徴がある。この段階ですでに管玉１個体分の幅

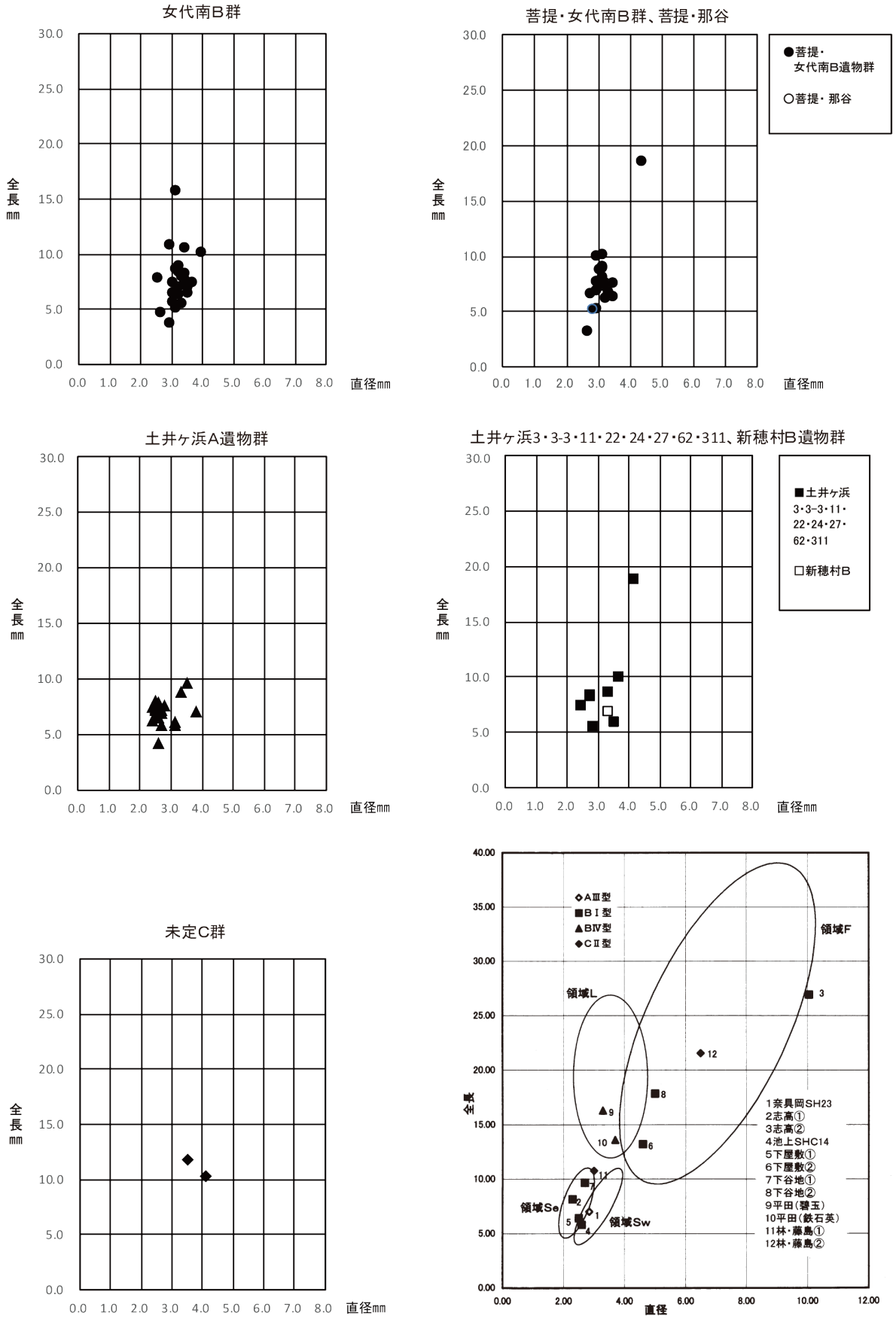
（径）が定まる。板状素材は表裏面の端から施溝分割を連続的に行い、棒状の管玉素材を作ることで、同一規格品の大量生産を可能にした。穿孔具は類例が少ないなか、前～中期は瑪瑙製打製石針と想定される。この技法は山陰を中心に前期後葉から中期にかけて主体的に行われ、管玉は全長 15㎜以下、直径２～４㎜の大きさで、山陰系の領域 Sw（大賀 2001）に分類される。

中期の管玉製作技術は、緑色凝灰岩を用いた西川津技法と、菩提・那谷・滝ヶ原産碧玉や女代南Ｂ群碧玉を用いた大中の湖技法（佐藤 1970）、新潟県佐渡で産出する猿八産碧玉・鉄石英を用いた新穂技法（計良・椎名 1961）に大別できる[5]。西川津技法は前期後半に続き、中期前葉は山陰以外に甑谷在田遺跡や朝日遺跡のように北陸西部や東海の一部にも拡散したが、中期中葉以降は山陰西部の狭小な範囲に限定して盛行した。

一方，大中の湖技法による管玉生産は、八日市地方遺跡、下屋敷遺跡、奈具岡遺跡、市田斉当坊遺跡、朝日遺跡、女代神社南遺跡、青谷上寺地遺跡、東前遺跡などのように、主に北陸西部や近畿を中心とし、東海、山陰東部など西日本の広範囲に瞬く間に広がった。この技法は菩提・那谷・滝ヶ原産碧玉や女代南Ｂ群碧玉を主に使用し、施溝具は紅簾片岩（こうれんへんがん）製石鋸、穿孔具は安山岩製磨製石針を用いる点で共通する。同技法は、原石・石核から自然面や不均質な部分を除去し、施溝分割によって立方体や直方体の素材を作ることを第一の目的とする。立方体等の素材は作業面を転移させながら二等分になるように施溝分割し、最終的に管玉１個体分の素材が獲得できるよう表裏面から施溝分割（ヨコ割り）するまで繰り返される。管玉の規格は最終の施溝分割まで決定しないが、長さと径が画一的な管玉を大量生産することができる。この技法で作られた管玉は、全長 15㎜以下、直径 2.0 ～ 5.0㎜の小型品（領域 Se･Sw）と、全長 15㎜以上、直径 4.0㎜以上の大型品（領域Ｆ）に大別されている（大賀 2001・2010b）。さらに大賀克彦氏は、大型品のうち全長 15.0 ～ 25.0㎜、直径が 4.0 ～ 6.0㎜で比較的狭い範囲に集中するものは西日本系の領域Ｆ’に分類するほか、小型品は全長 12㎜以下、直径 2.0 ～ 4.0㎜の細身のものを東日本系の領域 Se、全長 13㎜以下、直径 2.0 ～ 4.0㎜強のわずかに太身のものを西日本系の領域 Sw に分類している（大賀 2001・2010b・2011）。下屋敷遺跡、八日市地方遺跡、奈具岡遺跡、市田斉当坊遺跡などの北陸西部から近畿の玉作遺跡で作られた管玉は、東日本系の領域 Se を指向する。一方、西日本系の領域 Sw の管玉の生産地は現状では明確ではないが、小規模な玉生産の様相や同系の管玉の流通状況から、管玉の石材は北陸西部から搬入しつつ、山陰の鳥取県西部から島根県東部、近畿の淀川流域から大阪湾北岸、北部九州の唐津平野周辺が生産の候補地としてあげられている（大賀 2010b）。

新穂技法は新潟県佐渡の猿八産碧玉、鉄石英を多用し、流紋岩製石鋸、石針を工具として用いる。同技法は中期後半から後期にかけて新潟県佐渡玉作遺跡群（平田遺跡、新穂玉作遺跡ほか）を中心に実施され、下谷地遺跡、吹上遺跡などにも伝播した。同じ石材や技術の分布は北陸東部に限定される。

土井ヶ浜遺跡では埋葬遺構に伴う管玉は、緑色凝灰岩（土井ヶ浜Ａ遺物群）製の山陰系の管玉が７遺構で計 11 点、菩提・那谷・女代南Ｂ群碧玉製の西日本系の管玉は８遺構で 27 点、女代南Ｂ群碧玉製の西日本系の管玉は２遺構で２点、半島系の未定Ｃ群碧玉製管玉は１遺構で１点、土井ヶ浜 11・3-3 遺物群碧玉製の管玉は西日本系で各１点、土井ヶ浜 62 遺物群の緑色凝灰岩製管玉は東日本系で１点がある（表１、図７）。また、出土地点が不明な管玉 43 点については、半島系の未定Ｃ群



【参考】玉作集落における管玉の法量（大賀 2001 より転載）

図７　土井ヶ浜遺跡出土管玉の法量分布

碧玉製管玉 1 点、菩提・女代南 B 群 8 点、女代南 B 群 12 点、新穂村 B 遺物群 1 点と土井ヶ浜 22・24・27 群 3 点の碧玉製管玉は西日本系、緑色凝灰岩（土井ヶ浜 A 遺物群）製の管玉 17 点は山陰系、不明 1 点に分類される。

104・127 号土坑墓、4 号石囲墓、ST1120 土坑墓から出土した緑色凝灰岩（土井ヶ浜 A 群）製の山陰系管玉は、弥生時代前期後葉から中期にかけて山陰を中心に西川津技法で製作された管玉の特徴をもつ。これらの遺構では管玉が山陰系のみで構成されるため、時期は弥生時代前期後葉に遡る可能性がある。また、221 ～ 224 号人骨・ST1118 土坑墓、ST1112 集骨遺構から出土した菩提・那谷・女代南 B 群碧玉製の西日本系の小型管玉は、弥生時代中期中葉から後葉にかけて大中の湖技法で作られた管玉の特徴をもち、大賀克彦氏が想定するように山陰の鳥取県西部、近畿の大阪湾北岸～淀川流域、北部九州の唐津平野が生産の候補地とされる。248 号土坑墓出土管玉は女代南 B 群碧玉の東日本系の小型に分類され、弥生時代中期に北陸西部、近畿、山陰東部の広範囲に共通した大中の湖技法で作られた可能性がある。

これらのことから、土井ヶ浜遺跡では山陰や西日本で生産された管玉を主体とし、ごく稀に朝鮮半島、北陸西部や近畿、山陰東部で作られた管玉を入手していたと考えられる。さらに、104 号土坑墓で 25 ～ 26 点、ST1118 土坑墓で菩提・女代南 B 群碧玉の西日本系等の管玉 13 点が出土しているが、他の単体埋葬遺構から出土した管玉は 1 ～ 4 点であることから、まとまった数の管玉が流通することは少なく、遺跡内で特定の成人に再分配していたことが想像される。

（2）ヒスイ製勾玉

弥生時代のヒスイ製玉類は勾玉にほぼ限られる。産地分析では、列島各地で出土した弥生時代のヒスイは新潟県糸魚川産に限定されることが推定されている（藁科 1990）。ヒスイ製勾玉は、定形、獣形、緒締形、半玦型などの様々な形態がある（森 1980、木下 1987）。これらは生産地の状況と消費地の地域的特徴から、定形、獣形、緒締形は北部九州系、半玦型は北陸（西部・東部）系に分類される（大賀 2012）。ヒスイ製勾玉のうち、生産地が確認されているのは半玦型勾玉である。これは中期中葉の福井県下屋敷遺跡をはじめ、中期中葉～後葉の石川県八日市地方遺跡、吉崎次場遺跡、富山県石塚遺跡、新潟県箕輪遺跡、下谷地遺跡、吹上遺跡、竹の花遺跡、桂林遺跡で生産され、後期には福井県林・藤島遺跡、富山県下老子笹川遺跡で継続した。生産地は北陸を中心とし、弥生時代中期は大中の湖技法や新穂技法による管玉生産に伴う。施溝分割によって勾玉の素材を作出している点は、弥生時代中期に北陸で盛行した管玉製作技術との技術的な共通性が認められる。

土井ヶ浜遺跡では 223 号人骨（幼児）からヒスイ製勾玉が出土している。未成人にヒスイ製勾玉が副葬されていることは、遺跡内での勾玉の使用や未成人の扱われ方を探るうえで注目される。223 号人骨出土の糸魚川産ヒスイ製の勾玉は、長さ 2 ㎝以下の小形の半玦型勾玉で、石針による両面穿孔である。これは北陸西部系の特徴をもち、弥生時代中期中葉から後葉に北陸で生産された可能性が高い。

（3）アマゾナイト製玉類

アマゾナイトは微斜長石の一種で、天河石とも呼ばれる。新石器時代後半～青銅器時代の朝鮮半島の石製装身具については、大坪志子氏が玉類の形態や石材、出土遺構、変遷、系譜などを包括的に検

討している。青銅器時代の朝鮮半島で緑色の石を選択的に用いる点は中国東北部の影響を受けていることを再認識したほか、管玉は碧玉、勾玉や丸玉・小玉は天河石というように基本的に品目ごとに石材を分けて使用することについては、縄文時代後期後葉から出現する日本列島の玉類との関連も示唆した（大坪 2001）。また、朝鮮半島南東部では、山清郡黙谷里遺跡で天河石の曲玉・小玉未成品や砥石、晋州大坪遺跡で無文土器時代（青銅器時代）に天河石製勾玉・丸玉、ハイガイ平玉未成品、穿孔具や砥石が出土しており、青銅器時代の天河石製玉類や貝玉の生産遺跡が明らかになりつつある（国立晋州博物館 2001 ほか、李 2002、庄田 2004）。

一方、日本列島では天河石製勾玉や臼玉、未定Ｃ群碧玉製管玉の半島系玉類について、弥生時代前期には北部九州を中心とする西日本に流通した状況が大賀克彦氏（2011）によって端的にまとめられており、天河石製の不定形な勾玉や臼玉は朝鮮半島南東部から搬入したものと理解されている。

土井ヶ浜遺跡では 4 号石囲墓（315 号人骨・壮年女性）、ST1116 土坑墓（1116 号人骨・熟年男性）からアマゾナイト製小玉 (6) が 1 点ずつ出土しており、この玉類の分布状況からそれぞれの被葬者は渡来人との関係性あるいは朝鮮半島南部との交流が深かったことが推測される。4 号石囲墓では山陰系の緑色凝灰岩製管玉 1 点と共伴、ST1116 土坑墓で単独で出土しているが、アマゾナイト製小玉の主な流入時期を評価するならば、時期は弥生時代前期の可能性がある。天河石製臼玉は土井ヶ浜遺跡以外に、福岡県大木 7 号土壙墓、広田遺跡Ⅳ区 5 号甕棺墓、佐賀県東山田一本杉 72 号甕棺墓（大賀 2001）などで出土しているが、天河石製勾玉と共伴する例があることや両者の分布が北部九州周辺の玄界灘・響灘沿岸部に限定的であることは注視される。

4　土井ヶ浜遺跡における装身原理の特徴

以上では、土井ヶ浜遺跡の埋葬遺構から出土した石製玉類を中心に出土状況、玉類の特徴や流通について検討した。最後に、西日本の弥生時代前期～中期の墓地遺跡のうち、装身具を伴う人骨が複数例確認された遺跡と比較することで、土井ヶ浜遺跡を構成した造墓集団の装身原理の特徴を明らかにする。同遺跡の副葬品等については、乗安和二三氏（2014b）が詳しく検討しており、学ぶところも多い。

土井ヶ浜遺跡において玉類や貝製品などの装身具を伴い、性別や年齢が同定された埋葬遺構・人骨は、成人が男性 5、女性 16 の計 21 例、未成人が小児 2、幼児 5、乳児 1 の計 8 例ある（表 2）。遺跡全体では性別や年齢に区別なく装身具が副葬されていると言えるが、特に成人女性への副葬が目立つ。埋葬された年齢とも関わるが、男性は熟年以上に装身具の副葬が限定されるのに対し、女性は老年から成年まで幅広いなかでも熟年や壮年への副葬例が多い。管玉は男女に副葬されるが、女性への副葬例が顕著であるほか、104 号・ST1118 土坑墓のように多数の管玉を副葬した例は男女の特定個人であったことが指摘できる。ただし、副葬品の内容や墓の構造は他の墓と大きな格差はみられない。また、アマゾナイト製小玉は 4 号石囲墓（315 号人骨・壮年女性）と ST1116 土坑墓（1116 号人骨・熟年男性）のように、性別や世代に関係なく、渡来人や朝鮮半島との関連が深い性格をもつと考えられる。

貝製品では小玉、貝輪、指輪が副葬されている。小玉やマガキ指輪は女性への副葬が事例や個数と

表２　土井ヶ浜遺跡における被葬者の性別・年齢と副葬品の組成

性別	年齢	出土遺構	人骨番号	時期	玉類			貝製品			その他
					ヒスイ勾玉	管玉	小玉	小玉	貝輪	指輪	
男性	老年	ST1116土坑墓	1116号人骨	中期			アマゾナイト１				
	熟年	124号土坑墓	124号人骨	中期？				1	ゴホウラ2		石鏃12、鮫歯鏃2
		ST1120土坑墓	1120B号人骨	中期		2					
		ST902石囲墓	902号A人骨	中期						マガキガイ2	
	成年	ST1118土坑墓	1118号人骨	中期前半		13		1			
女性	老年	104土坑墓	103号人骨	中期初頭		1					
	熟年	ST903土坑墓	903号人骨	前期				1			
		203号土坑墓	203号人骨	前～中期					タマキガイ1		
		104号土坑墓	104号人骨	中期初頭		2			ゴホウラ2		
		109号土坑墓	109号人骨	中期？		1		13			
		127号土坑墓	127号人骨	中期？		4		178		マガキガイ2	
		250号石囲墓	251号人骨	中期				数個			
		ST904土坑墓	904号人骨	中期				1			
		ST907土坑墓	907号人骨	中期				7		マガキガイ4	
		ST1120土坑墓	1120Ａ号人骨	中期		1		14			
	壮年	4号石囲墓	315号人骨	前期？		1	アマゾナイト１				
		311号土坑墓	311号人骨	前～中期		1					
		255号土坑墓	255号人骨	中期？				11			
		ST902石囲墓	902B号人骨	中期				482		マガキガイ1	
		ST1305土坑墓	1305号人骨	中期？					サトウガイ1		
	壮年	ST901石囲墓	901号人骨	中期				3			
－	小児	308号土坑墓	309号人骨	前～中期					タマユガイ1		
		237号土坑墓	237号人骨	中期？					ユキノカサガイ1		
－	幼児	(221号土坑墓)	223号人骨	前～中期	1						同墓から貝小玉966、管玉7
		248号土坑墓	248号人骨	前～中期		1					
		２号石棺墓	３号人骨	中期？					マツバガイ9		
		127号土坑墓	128号人骨	中期？					ハイガイ8		
		220号土坑墓	220号人骨	中期？					イモガイ1		
－	乳児	ST910土坑墓	910号人骨	中期				16			

もに圧倒的に多い。木下尚子氏によれば、土井ヶ浜遺跡では貝輪にゴホウラ、アツソデガイなどの琉球列島産の大型巻貝を使用していることや、中期初頭から中期後半にかけて、ゴホウラの腹面から背面に至る幅広い部分を環とする厚手型貝輪から貝殻の腹面と背面に環体をもち、環上に巴形の孔をもつ土井ヶ浜型貝輪へと段階的に変化していくことを特色とした（木下 2014）。ゴホウラ腕輪は 104・124 号土坑墓のように男女に副葬されるのに対し、タマキガイ・サトウガイ腕輪は女性に限られる。

一方、未成人（小児・幼児・乳児）は玉類の副葬が極めて稀であるが、ヒスイ製勾玉は 221 号土壙墓の 223 号人骨（幼児）に副葬が限られる点は注目される。また、イモガイ・マツバガイ・ハイガイ・ユキノカサガイの腕輪は小児や幼児に限って副葬されるのに対し、マガキ指輪は副葬されないことなど、成人と区別している点は多い。

土井ヶ浜遺跡のように、西日本で弥生時代前期～中期の装身具を伴う人骨が複数例確認された遺跡として、島根県古浦遺跡（古浦遺跡調査研究会ほか 2005）、山口県中の浜遺跡（国分ほか 1988、豊浦町教育委員会 1984・1985）、佐賀県大友遺跡（呼子町教育委員会 1981）、長崎県浜郷遺跡（小田 1983）がある。装身具を伴う人骨は遺跡によって確認数に多少あるが、表３・図８にまとめたとおり、成人男女や未成人に伴う装身具は、遺跡あるいは性別や年齢によって選択的に着装・副葬されていることが見受けられる。

碧玉・緑色凝灰岩製管玉はいずれの遺跡でも成人男女にわりと普遍的に副葬される。男女ともに少数の管玉副葬例が大半を占めるなか、浜郷遺跡の６号人骨（成年男性）は 32 点、土井ヶ浜遺跡の

ST1118（1118 号人骨・男性熟年）は 13 点あり、特定の男性に多数の管玉を副葬する例がある。また、ヒスイ製勾玉の副葬は男女や未成人の区別はないが、管玉に比べると極端に少なく、限定的である。さらに鏃の副葬は成人男性に限られる。

貝製品は地域や遺跡、年齢によって副葬の有無が著しい。貝輪をみると、大友遺跡ではゴホウラガイは男性、イモガイは女性、オオツタノハガイは壮年女性と小児、浜郷遺跡ではタマキガイは女性というように、性別によって貝の種類を選択しているうえ、男性は右腕、女性は左または右、未成人は女性と同様に貝輪を着装する習俗があったことが説かれている（木下 1996）。また、貝指輪は土井ヶ浜遺跡、浜郷遺跡で成人男女の特定個人に副葬されており、生前は社会的地位や身分の表徴、死後は霊魂封鎖の意味が込められていたことが示唆されている（乗安 1988）。

未成人（小児・幼児）は全体的に玉類副葬が少ないなか、土井ヶ浜遺跡ではヒスイ製勾玉が未成人に限定されている。また、古浦砂丘遺跡の 21 号人骨（幼児）では頭部の両脇に管玉が 1 点ずつ見つかっており、耳飾りであった可能性がある。貝小玉は古浦遺跡、土井ヶ浜遺跡、中の浜遺跡の幼児には顕著にみられ、一遺構あたりの個数も多い。貝輪は古浦遺跡ではオオツタノハ、土井ヶ浜遺跡ではユキノカサ、マツバガイ、ハイガイを選択して積極的に副葬するのに対して、中の浜遺跡や大友遺跡ではわずかである。このうち、古浦遺跡では貝輪が未成人に特化して装着された。同遺跡の貝輪をもとに緻密に検討した末、子供を区別する考えは、縄文時代には認められず、朝鮮半島から農耕文化とともに伝わった習俗であることを木下尚子氏（2005）は示唆された。

以上のように限られた事例ではあるが、弥生時代前期～中期における玉類や貝製品などの装身具は、被葬者の性別や年齢のみならず、社会的な身分や性格を示すことがあった。このことは各装身具に意味づけされた装身原理が地域や集団間で共有されていたことが想定される。玉類では、管玉は性別や年齢に関係なく普遍的に副葬されるのに対し、ヒスイ製勾玉やアマゾナイト製玉類は特定個人に副葬

表 3　弥生時代前～中期の主な墓地における人骨に伴う副葬品の組成

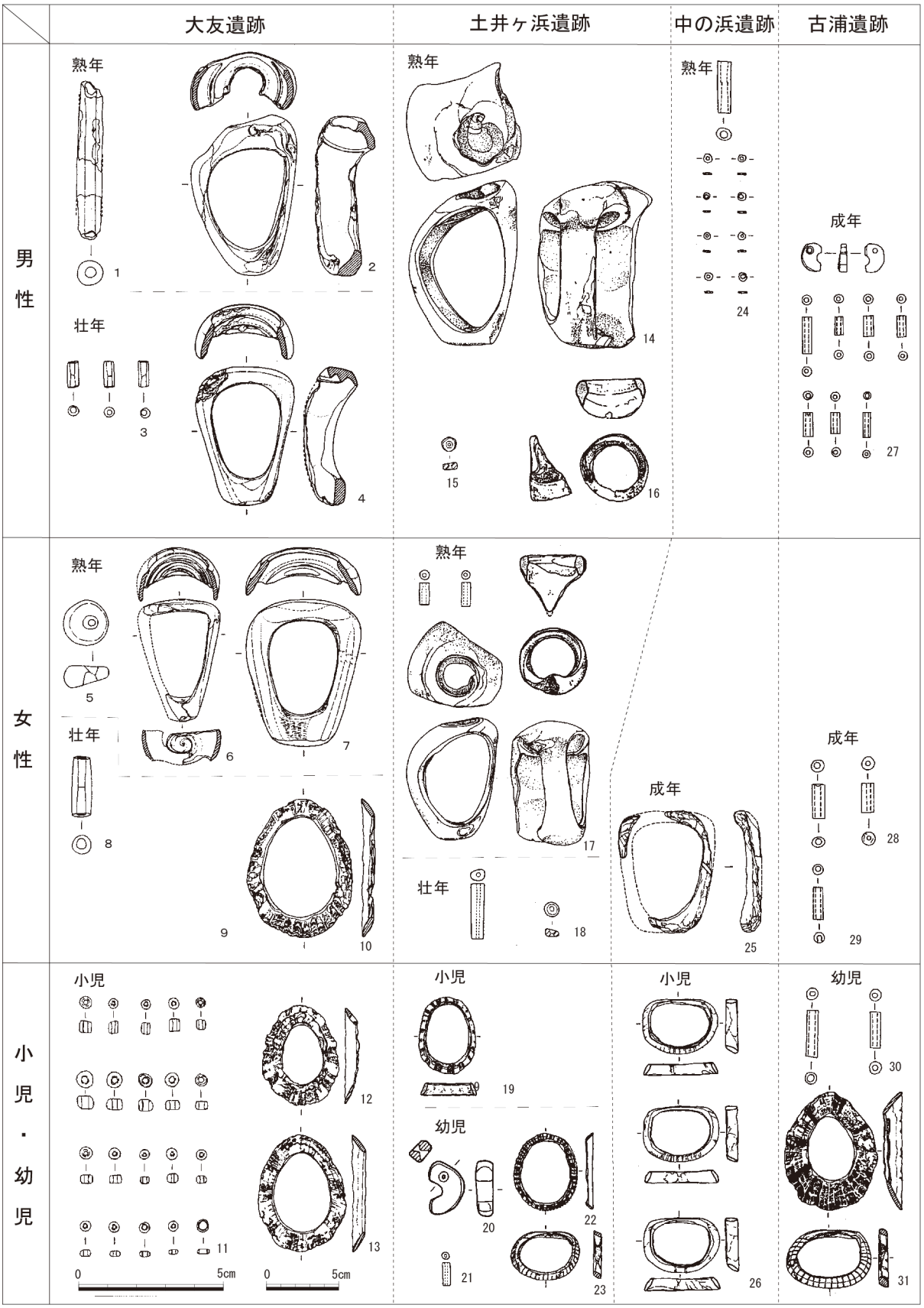
【成人】

地域	遺跡名	男性							女性						
		玉類			貝製品			その他	玉類			貝製品			その他
		ﾋｽｲ勾玉	管玉	小玉丸玉	小玉	貝輪	指輪		ﾋｽｲ勾玉	管玉	小玉丸玉	小玉	貝輪	指輪	
島根	古浦砂丘遺跡	○	◎							○					
山口	土井ヶ浜遺跡		◎	A	◎	◎	○	石鏃・鮫歯鏃		●	A	●	●	●	
山口	中の浜遺跡		○		◎	○		磨製石鏃		◎		●			
佐賀	大友遺跡		○・G			○				◎	J		○		
長崎	浜郷遺跡		◎			○	○	ｱﾜﾋﾞ3		○			●	○	

【未成人】

地域	遺跡名	小児							幼児						
		玉類			貝製品			その他	玉類			貝製品			その他
		ﾋｽｲ勾玉	管玉	小玉丸玉	小玉	貝輪	指輪		ﾋｽｲ勾玉	管玉	小玉丸玉	小玉	貝輪	指輪	
島根	古浦砂丘遺跡		○		○	◎				○		●	●		
山口	土井ヶ浜遺跡					○			○	○		◎	●		
山口	中の浜遺跡		○									●			
佐賀	大友遺跡			G		○							?		
佐賀	浜郷遺跡							鹿角製垂飾品							ｱﾜﾋ・貝管玉

※管玉・小玉・丸玉のうち、○は碧玉・緑色凝灰岩、A：アマゾナイト（天河石）、J：ヒスイ、G：ガラス
※●：事例・点数が多い、◎：特定の遺構で点数が多い、○：事例・点数が少ない



【大友遺跡】１：２次 10 号配石墓、２：３次３号箱式石棺、３：２次 15 号土壙墓、４：１次 15 号箱式石棺、５：４次 50 号石囲墓、６：３次 34 号再葬墓、７：１次１号甕棺墓、８：２次 13 号再葬墓、９：４次 47 号配石墓、10：２次 50-1 号土壙墓、11：３次 28・29 再葬墓、12：２次 50-2 号再葬墓、13：２次 23 号配石墓、
【土井ヶ浜遺跡】14：124 号人骨、15：ST1116、16：217 号人骨、17：104 号人骨、18：315 号人骨、19：237 号人骨、20：223 号人骨、21：248 号人骨、22：１号箱式石棺３号人骨、23：128 号人骨
【中の浜遺跡】24：ST901、25：ST905、26：３号石棺、【古浦遺跡】27：49 号人骨、28：35 号人骨、29：45 号人骨、30：46 号人骨、31：29 号人骨

図８　弥生時代前～中期の主な墓地における人骨に伴う装身具（玉類・指輪 1/2、貝輪 1/4）

が限られた。貝製品では、貝小玉が女性や未成人に顕著であること、貝輪は性別や年齢によって貝の種類を選択していること、貝指輪は成人に限定されることなどを土井ヶ浜遺跡の調査成果や先学に導かれながら、再確認することができた。

まとめ

本稿では、土井ヶ浜遺跡で出土した石製玉類を中心に出土状況や生産地を検討したうえ、人骨に伴う事例をもとに玉類副葬の特徴や装身原理について検討した。同遺跡には山陰や西日本で生産された管玉が多く流通し、朝鮮半島や北陸で作られた玉類もわずかにもたらされた。また、玉類や貝製品などの装身具は種類によって性別や年齢を区別したものがあることから、土井ヶ浜遺跡をはじめとする弥生時代の墓地遺跡では地域や集団ごとに装身原理が共有されていたことを考えるに至った。本研究の根底には、土井ヶ浜遺跡で人骨の保存状態が極めて良好であることや長期間にわたって蓄積された緻密かつ膨大な調査研究があるとは言うまでもない。

小稿の執筆にあたり、松下孝幸氏には土井ヶ浜遺跡や出土玉類について細部にわたって懇切に御教示いただくとともに、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムには資料調査でお世話になりました。末筆ながら、記して御礼を申し上げます。

註

（1）報告書の図番号 1 のソーダ石灰ガラス製丸玉が試掘坑から出土したが、田村 2014 によると、当該資料の化学組成は古代ガラスに類似しないという結果が得られたことから、本稿では検討対象としない。

（2）乗安 2014a によると、第 7 ・19 次調査では板付Ⅰｂ並行期まで遡る可能性が指摘されている。

（3）松下孝幸氏の御教示によると、乗安 2014a に記された「221 号土坑墓」は、221 ～ 223 号人骨の複数体埋葬と捉えられているが、墓坑は未確認で、埋葬遺構が重複しているようである。

（4）調査日誌によると、管玉は 25 ～ 26 点ほど出土したとされる。

（5）大賀 2001 では、西川津技法はＡ技法、大中の湖技法と新穂技法はＢ技法に相当する。

（6）松下・小林編 2014 ではアマゾナイト製「小玉」と報告されているが、大賀 2011 でいう天河石製の臼玉と同義と捉えられる。

参考文献

伊東輝雄　1997「山口県北浦沿岸の葬制と変遷」『研究紀要』第 1 号　下関市立考古博物館

大賀克彦　2001「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』第 86 巻第 4 号　日本考古学会

大賀克彦　2002「日本列島における管玉生産の成立」『甑谷』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ　清水町教育委員会

大賀克彦　2010a「東大寺山古墳出土玉類の考古学的評価－半島系管玉の出土を中心に－」『東大寺山古墳の研究 - 初期ヤマト王権の対外交渉と地域間関係の考古学的研究 -』東大寺山古墳研究会・天理大学・天理大学附属天理参考館

大賀克彦　2010b「女代南Ｂ群碧玉製管玉に関する認識」『中原遺跡Ⅳ』佐賀県教育委員会

大賀克彦　2011「弥生時代における玉類の生産と流通」『講座日本の考古学５　弥生時代　上』同成社

大賀克彦　2012「古墳時代前期における翡翠製丁字頭勾玉の出現とその歴史的意義」『古墳時代におけるヒスイ勾玉の生産と流通過程に関する研究』平成 21 ～ 23 年度科学研究費補助金若手研究（Ｂ）研究成果報告書（研究代表者　髙橋浩二）

大坪志子　2001 「朝鮮半島の石製装身具」『文学部論叢』第 73 号　熊本大学文学会

小田富士雄　1983『九州考古学研究－弥生時代篇－』小田富士雄著作集３　学生社

金関丈夫・坪井清足・金関恕　1961「山口県土井ヶ浜遺跡」『日本農耕文化の生成』東京堂出版

河村好光　2010『倭の玉器　玉つくりと倭国の時代』青木書店

木下尚子　1987「弥生定形勾玉考」『東アジアの考古と歴史』中巻　岡崎敬先生退官記念論文集

木下尚子　1996『南東貝文化の研究』法政大学出版局

木下尚子　2005「弥生時代の子供用貝輪論－古浦遺跡の貝輪によせて－」『古浦遺跡』古浦遺跡調査研究会・鹿島町教育委員会

木下尚子　2014「土井ヶ浜型貝輪の生成と展開」『土井ヶ浜遺跡』下関市教育委員会、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

計良由松・椎名仙卓　1961「後期弥生文化の攻玉法－佐渡新穂玉作遺跡の資料を中心として－」『考古学雑誌』 第 47 巻第 1 号　日本考古学会

国分直一・木下尚子・伊藤輝雄　1988「中ノ浜遺跡の弥生時代前期埋葬」『地域文化研究』第３号　梅光女学院大学地域文化研究所

国立晋州博物館　2001『大坪里玉房 1 地区遺跡Ⅰ・Ⅱ』

佐藤宗男　1970「大中の湖南遺跡における玉作について」『古代文化』第 22 巻第 1 号　(財) 古代学協会

古浦遺跡調査研究会・鹿島町教育委員会　2005『古浦遺跡』

庄田慎矢　2004「玉作から分業を考える－韓国晋州大坪遺跡の分析から－」『考古学研究』第 50 巻第 4 号　考古学研究会

田村朋美　2014「土井ヶ浜遺跡出土ガラス片および玉類の分析」『土井ヶ浜遺跡』下関市教育委員会、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

寺村光晴　1990「タマの道－タマからみた弥生時代の日本海」『日本海と北国文化　海と列島文化』第 1 巻　小学館

豊浦町教育委員会　1984『史跡　中ノ浜遺跡」

豊浦町教育委員会　1985「中ノ浜遺跡第９次発掘調査概報」

乗安和二三　1988「弥生時代の指輪」『日本民族・文化の生成』永井昌文教授退官記念論文集　六興出版

乗安和二三　2014a「埋葬と葬送習俗」『土井ヶ浜遺跡』下関市教育委員会、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

乗安和二三　2014b「土井ヶ浜遺跡出土の副葬品・供献品等について』『陶塤』第 27 号　公益財団法人山口県ひとづくり財団　山口県埋蔵文化財センター

森貞次郎　1980「弥生勾玉考」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会

松下孝幸・小林善也編　2014『土井ヶ浜遺跡』下関市文化財調査報告書 35　下関市教育委員会、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

米田克彦　2013「弥生時代における玉生産の展開」『日本海を行き交う弥生の宝石～青谷上寺地遺跡の交流をさぐる』

鳥取県埋蔵文化財センター

米田克彦　2021「弥生文化成立期における管玉生産の展開」『山陰弥生文化の形成過程』島根県古代文化センター

呼子町教育委員会　1981『大友遺跡』

李相吉（高田貫太訳）　2002「装身具からみた細形銅剣文化期の特徴」『細形銅剣文化の諸問題』九州考古学会・嶺南考古学会

李弘鐘・朴淳發・朴天秀・朴升圭・李在煥・藁科哲男・中村大介　2008「韓半島における玉類の理化學的分析と流通」『湖西地域　邑落社会の変遷』第 17 回湖西考古学会学術大会　湖西考古学会

藁科哲男・東村武信　1987「ヒスイの産地分析」『富山市考古資料館紀要』第６号　富山市考古資料館

藁科哲男　1990『ヒスイを科学する－その後の成果－』『古代翡翠道の謎』新人物往来社

藁科哲男　1994『玉類の原材産地分析から考察する玉類の分布圏の研究』平成５年度科学研究費補助金（一般研究Ｃ）研究成果報告書

藁科哲男　1997「宇木汲田遺跡出土のヒスイ製勾玉、碧玉製管玉の産地分析」『佐賀県立博物館・佐賀県立美術館調査報告書』第 22 集

藁科哲男　2014「土井ヶ浜遺跡出土石製玉類の石材原産地分析」『土井ヶ浜遺跡』下関市教育委員会、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

図出典

図１～５は松下・小林編 2014、図６は米田 2013 をもとに作成、図７の一部は大賀 2001 より転載。

＊ 岡山県古代吉備文化財センター